

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：32418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02384

研究課題名(和文)ベルナール・ハイツィックおよびフランス前衛詩における叙情性について

研究課題名(英文) Bernard Heidsieck and the lyrism of the French avant-garde poetry

研究代表者

熊木 淳 (KUMAKI, Atsushi)

尚美学園大学・総合政策学部・その他

研究者番号：90738618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：フランスの音声詩人であるベルナール・ハイツィックの作品における音とテキストとの相互補完的な関係について明らかにした。フランス音声詩の大きな特徴の一つであるテキスト(視覚詩)の使用が、その叙情的主体の構成において大きな役割を担っているとともに、それが読まれることによって、テキストのみによって構成された叙情的主体が声によって大きな変容を受け、新たな自我が構成されることを明らかにした。またこのようなハイツィックの詩的实践が単に詩を読むということにとどまらず、パフォーマンスという身体表象と結びつき、観客との相互作用を企図する側面を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I revealed the complementary relationship between sound and text in Bernard Heidsieck's work, a French sound poet. The use of text (visual poetry), one of the major features of French sound poetry, plays an important role for its lyrical subject, and by reading the subject is transformed greatly by voice and a new poetic subject is created. Also, I revealed that Heidsieck's poetic practice is not limited to reading, but linked with physical representation, that is performance, and I clarified the aspect that his poetry intends to interact with audiences.

研究分野：フランス文学

キーワード：前衛詩 音声詩 フランス詩

1. 研究開始当初の背景

フランス音声詩は、フランスにおける前衛詩の中でも比較的早く、50年以上の歴史があるとはいえ、第一人者が存命中であり、研究の蓄積が急がれている分野であるといえる。フランスでは決して多くはないとはいえ徐々に研究が盛んになりつつあり、またシンポジウム等がしばしば開催されている。一方日本では全くと言っていいほど知られておらず、研究の蓄積も皆無である。そこでアントナン・アルトーという20世紀後半のフランス前衛詩に大きな影響を及ぼした詩人の研究を出発点として、その影響下にあると言っていいベルナル・ハイツィックの音声詩および彼の詩論を理論的に検討することが喫緊の課題であった。ハイツィックを研究対象とする理由は、彼がフランス音声詩の分野で中心的な役割を担ってきたのはもちろんのことであるが、当時彼が存命であり、直接コンタクトをとることによって、自身の言葉をもとに精緻な研究を行うことが急務であると考えられたからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は微視的および巨視的な観点から二つに分けることができる。

- (1) 微視的な観点においては、フランスの音声詩の代表的詩人であるベルナル・ハイツィックの詩論を、自我および日常性という概念をもとに理論的に解明すること。
- (2) 巨視的な観点においては、フランス音声詩を出発点として、これまで主流の現代詩の文脈から排除されてきた前衛詩を正確に位置づけること。

どちら場合においても詩における自我の表現、つまり叙情性の概念がその研究の中心に位置づけられるだろう。なぜなら、この叙情性という概念は1990年代以降、フランス詩の読解および研究において極めて重要なキー概念になっていったからであり、この概念を音声詩研究に組み込んでいくことで、いわゆる主流の現代詩の文脈に音声詩に代表される前衛詩を位置付けることができるからである。

また、第二の点においては、ハイツィックのみならず、アンリ・ショパンやフランソワ・デュフレーヌなどの他の音声詩人、加えて音声詩とも密接な関係を持っているジュリアン・プレーヌに代表されるパフォーマンス詩をも視野に入れ、さらにはフランスだけではなく、その他の地域、とりわけ英語圏の音声詩の領域との比較研究を行うことが不可欠である。とりわけブライオン・ガイシンなど、実際に当時のフランスの音声詩人たちと交流のあった詩人も何人かおり、長期的にはフ

ランス語圏、英語圏といった言語ごとの区別を排したうえで20世紀後半に世界中で発生し発展した音声詩という前衛詩のジャンルを見通す視野を獲得することが目的とならねばならないだろう。

3. 研究の方法

研究方法としては、従来の文学研究と同様に資料の収集およびその分析に時間の大半が費やされることになった。

だがそれに加えて、研究対象が現在進行形で発展しつつある音声詩ということもあり、シンポジウムやイベント等に参加し、実際の詩人たちとも接触することも極めて重要である。研究期間内では来日したジュリアン・プレーヌ、アンヌ=ジェイムズ・シャトン、アンヌ=ロール・シャンボワシエらと知己を得ることができた。研究対象であるベルナル・ハイツィックについては、研究課題申請時には存命であったが、科研費交付前に他界してしまい、インタビュー等はかなわなかった。

4. 研究成果

本研究に関連する成果として、査読論文2本、著書の分担執筆が1本、学術発表が4件であった。なお、研究期間中に提出し、2018年6月現在条件付きアクセプトの上修正し査読結果待ちの仏語論文が1本ある。

- (1) 「声と文字—視覚詩人としてのアンリ・ショパン」
本発表では音声詩の中心人物であるアンリ・ショパンについて、その特異な詩の理念を明らかにすることを目的としている。一見ショパンはレトリズムを強烈に推し進めたような言語も文字も完全に捨て去った作品を作り出しているように見えるが、実は他方で文字そのものの形象を利用したタイプライターポエムを数多く発表しており、これらの作品は彼の音声詩と理念的に強く結びついている。この理念を明らかにし、今後のショパン研究の礎とした。なお、本発表をもとにした研究論文が、「声、文字、アルファベット—アンリ・ショパンにおける詩的言語」である。本論ではショパンの主張する「アルファベット」の概念により注目して発表を発展させた。一聴してノイズのようにしか聞こえない彼の音声詩は視覚詩と対になることで彼の主張する「アルファベット」の一つの有り様となるのであり、彼が考える詩とはこの「アルファベット」の多様なあり方を生み出すものなのである。彼の音声詩はその一部なのであり、まぎれもない「詩」なのである。
- (2) 「20世紀フランス文学をめぐるアヴァンギャルド的思考」進藤久乃、門間広明、

前山悠各氏と行ったワークショップ。20世紀後半のフランス文学における前衛について、その中でも他国と比べて独特な発展を遂げた音声詩を中心に考えた。一般に前衛の特徴と考えられているミニマリズム的傾向はフランス音声詩にはないことに注目し、20世紀後半においては、前衛的な解放のテーマが社会運動等に結びつかず、多様な言語仕様の模索と言う形で現れたと指摘した。

(3) 《Lavoix résistant : 《Révolte contre la poésie》 d'Antonin Artaud et la poésie action de Bernard Heidsieck》
ハイツィックの音声詩の理論的源泉をアルトーの詩論、「詩への反抗」をめぐる議論と接続して明らかにした。アルトーはネルヴァルの「アンテロス」について、詩人の創造を実現するためにネルヴァルが行った反抗、創造を行うためにそれ以前にすでに存在していたものへの抵抗を見出した。対してハイツィックは詩をテキストと音声的表象に分け、後者が前者を裏切る様を実践した。これこそハイツィックがアルトーから引き継いだ詩への反抗なのである。

(4) 「英語圏およびフランス語圏における音声詩を隔てるもの」英語圏の音声詩人であるブライオン・ガイシンおよびリチャード・コステラネツ、そしてハイツィックおよび彼ののちの世代の代表的な音声詩人であるトマ・プレシェらの作品を検討しつつ、両言語圏の音声詩のありようを比較した。1950年代に新たに生まれた音声詩はその名にも関わらずテキストとの特徴的なつながりを維持している。その関係を実際の作品を検討することで明らかにし、英語圏の音声詩におけるテキストからの乖離、フランス語圏のそれにおけるテキストへの執着を見出した。

(5) アンヌ=ロール・シャンボワシエ氏を招いて行われたシンポジウム『フランス音声詩をめぐって』において発表された「ページ、朗読、パフォーマンス ベルナール・ハイツィックの行動詩とクリスチャン・プリジャンの「書かれたものの声」」では、ハイツィックによる「行動詩」という呼称について検討した。彼は自らの詩を音声詩と名付けることを嫌い「行動詩」と呼ぶことを提唱したが、本発表はその理由を明らかにすることを目的としている。ハイツィックにとって視覚詩的要素やそれをもとに吹き込まれた音源はそれぞれ重要な彼の詩的創造の一部となるが、それだけでは足りない。彼の詩はコミュニケーションの契機とならなければならない、そのため彼は自らの詩を行動詩と名付けるのだ。

(6) これらの研究成果に加えて、年度末にウェブジャーナル Savoir en prise 誌に研究論文《Espace de la page, espace de la performance : la poésie action de Bernard Heidsieck》を投稿し、条件付きアクセプトの上、修正版を提出済みである。問題がなければ近いうちに公式サイト (<https://savoirsenprisme.com/>) に掲載されるはずである。本研究は(5)の口頭発表のもととなったものであり、ハイツィックの行動詩の概念を彼自身による朗読の実践に接続させ、それをクリスチャン・プリジャンの「書かれたものの声」の概念と比較してその理論的側面を明らかにした。本研究によって、この研究課題全体の次のステップである音声詩とパフォーマンスとの関わりという重要な問題を提起したのであり、以後の研究の基礎となるだろう論文である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

熊木淳「声、文字、アルファベット—アンリ・ショパンにおける詩的言語」『フランス語フランス文学研究』、査読あり、第108号、2016年、175-189頁、DOI https://doi.org/10.20634/e11f.108.0_175
https://www.jstage.jst.go.jp/article/e11f/108/0/108_175/_article/-char/ja/

Atsushi KUMAKI, 《Lavoix résistant : 《Révolte contre la poésie》 d'Antonin Artaud et la poésie action de Bernard Heidsieck》, Revue ERTA, n° 10, 2016, pp.121-135, DOI 10.4467/23538953CE.16.020.6718
<http://www.ejournals.eu/CahiersERT A/2016/Numero-10/art/8595/>

〔学会発表〕(計4件)

熊木淳「声と文字—視覚詩人としてのアンリ・ショパン」, 日本フランス語フランス文学会春季全国大会、明治学院大学、2015年5月30日

進藤久乃、門間広明、前山悠、熊木淳「20世紀フランス文学をめぐるアヴァンギャルド的思考」(ワークショップ)、日本フランス語フランス文学会春季全国大会、学習院大学、2016年5月30日

熊木淳「英語圏およびフランス語圏における音声詩を隔てるもの」, 日本比較文学会東京支部例会、清泉女子大学、2017年

5月20日

(4)研究協力者

()

熊木淳「ページ、朗読、パフォーマンス
ベルナール・ハイツィックの行動詩
とクリスチャン・プリジャンの「書かれ
たものの声」、国際シンポジウム『フラ
ンス音声詩をめぐって アンヌ＝ロ
ール・シャンボワシエ氏を招いて』日仏
会館、2018年2月22日

〔図書〕(計1件)

熊木淳「叙情に抗う声——オカール、
アルトー、ハイツィックにおける音声
的叙情主体」塚本昌則、鈴木雅雄編『声
と文学 拡張する身体の誘惑』平凡社、
2017年、279-296頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

熊木 淳 (KUMAKI Atsushi)
尚美学園大学 研究員

研究者番号：90738618

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：